

「えみふる」開設記念フォーラム こどもの「感性」を育む大人の役割

平成 28 年 3 月 20 日(日)10:15～12:00
であえーる岩見沢地下1階であえーるホール



パネラー
寅嶋 静香さん (大学教授、北海道教育大学)
井端 明男さん (建築家、株式会社アトリエアク)
川上 博美さん (家具職人、株式会社オークラ)
コーディネーター (司会) 所 美穂子 (市教育委員会、子ども課)

司会 皆様、えみふるオープン記念フォーラムにご参加いただきありがとうございます。私、本日のコーディネーターをさせていただきます、岩見沢市教育委員会子ども課の所と申します。

それでは、ここから、3 人のパネラーの皆さんとお話をすすめていきたいと思ひます。今日のテーマは「こどもの感性を育む 大人の役割」です。それぞれのお立場から、お話を頂きます。

トップバッターは、北海道教育大学岩見沢校の寅嶋静香さんです。寅嶋さんは、岩見沢の子ども・子育て会議の委員として「えみふる」のネーミングの際に審査にご協力いただいた、えみふる名付け親のお一人でもあります。



寅嶋 静香さん
北海道教育大学

季節を問わず子どもの成長を支える場

寅嶋 「えみふる」のあそびの広場を見て、広くのびのびとした空

間は、お子さんの様々な成長を助けてくれるのではないかな、と思ひました。

私の大学での研究テーマは、女性の健康と運動についてですが、今日は、「えみふる」と子育て支援についてお話ししたいと思います。子育て支援の広場の周りに、プロの専門集団がいることは、非常にいい。お子さんを育てているなかで、ちょっと困ったときに、常に専門家に相談できる場所があるのは重要です。相談のためにどこかに行くとなると、敷居が高く、難しい面があるかもしれませんが、子育てで広場にくれば、気軽に相談できる、発達の心配についても相談できるというのは心強いと思ひます。

子育て支援員のサービスが、広場を中心として行われていることがすばらしいと思ひます。支援員の皆様も研修を通して、スキルアップし、それによってまた利用率、稼働率があがっていくことを期待したいですね。

私が、岩見沢校勤務になったときのことで。歩道が見えない冬の寒い時期というのは、私にとって初めての経験でした。

雪の怖さがあり、子どもを外で遊ばせるのは、きついなと思ったこともありました。冬の寒いとき、身体発達の著しい就学前のお子さんが、身体を動かすことができないと、成長のさまたげにもなりますが、この場所に来れば遊ばせることができます。

あそびの広場には、誰かがいます。誰かに関わることが出来ます。支えてくれる人がいて、また季節を問わずに、広場が様々な成長を助けてくれるのは、非常に大きな子育て支援の役割を担ってくれると思います。

子どもの創造性と感性を刺激するあそび

司会 次は、「えみふる」の設計を担当していただきました、建築家の井端明男さんです。「えみふる」の、そしてあそびの広場の大きなテーマとなりました、子どもの感性を育むということについては、設計当初から井端さんから様々なご意見をいただいていたと思います。では、井端さんお願いします。



井端 明男さん
株式会社アドリエック

井端 あそびの広場の設計は、いい経験となりました。私は真剣に考えて建築の道に入った訳ではありませんが、最初は、住宅の建築からはじめ、その後、公共建築

に携わって30年以上がたちます。

当時は、学校が木造から鉄筋コンクリートに変わった時期でした。鉄筋コンクリートの校舎は、明るいように見えて実は閉鎖的です。学校の子どもたちに問題が起り始めたのもそのころだったと思います。

当時できたコンクリート建築は、今ではすでに建替え、大規模に改修する時期になっています。30年経ってそういう状態になっているのを見ると、建築というのは寿命が短いと思います。現在

は、学校も幼稚園も保育園も、オープンで明るくなって良かったと感じていますし、教育的耐用年数も長く、多様な建築になっていると思います。

最近は、「えみふる」もそうですが、子どもに関することから高齢者まで、0歳から90歳以上まで幅広い建築に携わっています。

「えみふる」のような施設は初めての試みで、いい経験をさせていただきました。あそびの広場の設計には、プロポーザルで選定されました。参加の時からこれは建築のデザインだと思い、その趣旨を徹底させ、伸び伸びと、自由に活動できる理想的なひろばを提案しました。

プロポーザルでは、1940年代に始まった冒険広場のことについて語りました。大人が与えた遊具はいつさい無く、ただ広場として広々としていて、広場には管理者がいます。子どもたちの指導者は、市の職員で冒険広場のプレーリーダーです。私たちの周りの管理者のように「あれはダメ、これはダメ」というのではありません。プレーリーダーは、子ども達といっしょになって、子どもたちの遊びを誘発する環境をつくる専門家です。「えみふる」も、そういう指導者、プレーリーダーがきちんと育ってくれるのが理想だと思います。

空き地に、リヤカーで廃材を皆で運び、子どもたちは、本物の道具を使って、自分たちのやりたいことを自由に考えます。そんな広場では、年齢に応じて自分たちがやりたいことをやり、つくりたいものを自由につくります。子どもは年齢に合わせて遊びます。小さい子はただ穴を掘るだけとか、大きな子は、もっと大掛かりに小屋などをつくってみるなどです。

おおらかに、子どもたちを見守る世界が必要です。それが、「えみふる」なんだと思います。「えみふる」は、屋内に広場をつくりましたが、アウトドア的で、遊びの中心になって様々な能力を養う広場であればいい。そして、センスオブワンダーをコンセプトに、空間を相手に、好奇心を持っていろいろ発見してほしいと思っています。

大人もいっしょに新しい発見をしてほしい。子

どもの遊びにはそういう大人が必要です。「えみふる」には、たくさんの空間をつくりました。立体的な書棚と巨大テーブルなどで、メインはデンという本物の小屋。これらすべて中身が充実したものです。そして、感性を刺激するには、かたち、色、空間のデザイン等、質を保つことが大事だと考えて、力を入れました。

子どもたちは本物を求めています。子どもだからというのではなく、大人と同じ。皆さんも子ども時代を思い出してください。大人と同じ本物がほしかったのではないかと思います。「えみふる」の空間はすべて、創造力と感性を刺激し、あそびのきっかけをつくる。そういう子どもたちを私たち大人は、おおらかに見守っていく必要があると思います。



川上 博美さん
株式会社オークラ

デザイナーと家具職人のコド木工

司会 最後に、川上博美さんです。ステージの前に飾らせていただいた作品は、あそびの広場においてあるもので、すべて川

上さんの手によるものです。中央にあるログ積み木は、川上さんのオリジナルで、手を広げた長さくらいのログ積み木を道産材で作ってほしいという私たちの願いに応じて、作って頂いたものです。

実は、川上さん、技能オリンピック全国大会、家具部門で、女性初の優勝者という経歴をお持ちです。ここにある作品は日本一の技術で作って頂いたものです。では、川上さん、お願いします。

川上 旭川にある株式会社オークラの川上博美です。今回、ここにある積み木たちをつくらせていただきました。木工をはじめた切っ掛けですが、実家でおじいちゃんが建具をつくっていて、お父さんが家具を作り始め、いまは建具と家具をつく

っています。自分は、小さいころから、工場の中で走り回り、木の切れ端を触って、玩具にして育ててきました。

そうした環境で育ったので、ものをつくることが大好きになって、とにかくつくることがとても楽しく、料理をつくることも大好き。何でも、つくる工程が好きで育ちました。大人になって、どんな職業につくかを考えたとき、最初は子どもが好きだったので保母さんと思いましたが、つくることから離れたくなくて、結果的に木工に進みました。

あるとき旭川で、木工キャンプといって、デザイナーさんたちと木工関係で働いている人が集まる年1回のキャンプがあり、それに参加しました。それがきっかけでコド木工という活動のメンバーに誘われました。コド木工のメンバーは、東京のデザイナー3名と旭川の4人の職人です。

コド木工でつくっている作品は、ここにある星型の作品「くみき」で、デザイナーと協力して、コド木工の商品としてつくったものです。「くみき」は、もともと建具の基本で、障子に組み込まれているものです。これを手で触れるようにと、デザイナーと話し合い、積み木をつくるような発想で開発しました。そのような活動を通して、今、こうして活動している私がいるわけです。



所 美穂子
岩見沢市教育委員会

司会 3人のパネラーの皆さんに、テーマにそったお話しをいただきました。子どもの感性を育む、ということについては、特別なものを伸ば

すということではなく、人と関わることが大切というお話が皆さんからあったと思います。子どもだけでなく、いろいろな人とかかわることがヒントになる。感性を育むということに対しては、「怪しからん、そんな必要は無い」なんていう人はい

なくて、大人はみんな子どもに感性豊かな人に育ってほしいと思っているわけです。

幸い今の日本は、ただ生きることだけで精いっぱいという国ではありません。生活は便利になり、豊かになって私たちのまわりはモノであふれています。でも、物質的な豊かさ、便利さが、子どもの感性の豊かさにつながっていないようにも見えます。

そこで次のテーマは、子どもの感性を育むという事について、「いま、こんなことが心配」ということについてお話いただきます。最初に、川上さん、作り手というお立場から、どのようにお考えになりますか。

温かさと個性を感じる木のおもちゃ

川上 いまのおもちゃ屋さんで扱っているおもちゃは、大体がプラスチックで、キャラクターものも多いと思います。私は、日ごろから木に触れて育ってきたこともあって、皆さんと違うかも知れませんが、皆さんにとって木は全部同じように見えるかもしれませんが、実際に触って感じてもらくと、家具もそれぞれに重さが違う、色も温かさも違う、手触りも違う。触ってみればわかります。

木の温かさに触れてほしい、小さいころから、そういうものに触れて、興味をもってほしいと思います。プラスチックは、みな同じ触り心地がし



あそびの広場と子どもたち

ます。無機質だと私には感じられます。もちろん、中にはいいものも出てきてはいます。しかし、色々ないいものに触れる機会を増やしてほしいと感じています。

司会 あそびの広場の積み木は 12 種類の木でつくっていただきました。かたちや、重さ、手触りが一つひとつ違い、触ったときの気持ち良さがありますね。では、次に井端さんお願いします。

創造に対する価値観を大切に

井端 子どもが心配というよりも、子どもに接する親が心配です。いろいろな映像や番組など、少し過激なものが多くなってきていて心配です。

これは今、突然、出てきた話ではなく、30年以上も前からあったことです。しかし、当時のゲーム、アニメなどは単純で、夢や希望というのも判りやすく、登場するロボットや、動物は擬人化されていて、物事の良し悪しなどをなんとなく教えてくれた。ほのぼのとしたものが感じられて、アニメは理想的な人間関係、家族関係、そして家族愛も教えてくれました。それを大人もいっしょに見て、涙を流していました。

しかし、最近のものは、「超」がつくほど過激なもの、残酷なものが多く、人間本来のやさしさや人情のようなものが無くなっていくようで、それはこわい。これは子どもではなく、大人が注意しなければならないことです。

もしこうして、幼児期の貴重な時期の創造力や感性、好奇心が、奪われてしまうと、大人になっても回復できません。一番大切なものが回復できないとすれば、大人の世界がますます貧しくなります。

過激な映像やゲームの前に、自然の中での体験を味わわせることが大人の責任です。

現在、幼稚園の設計をしていて、園長先生と話す機会がありました。「これからの子どもたちは、タブレットをもって、

遊ぶことになるのかな」と心配して言いましたら、園長は、子どもと向かい合っただけのコミュニケーションが大前提だとキッパリと言っていました。

ただ、小学校にあがると全員がタブレットをもって学習する時代です。先生が、「みなさんこちらを見て」、ではなくて「タブレットの画面を見て」、という時代が来ています。それはいやですね、という話になりました。

話は変わりますが、こういうところが増えるといいなということをお話します。以前、設計した佐藤忠良子どもアトリエが芸術の森にあります。有名な彫刻家の展示空間の中に、ワークショップスペースがあり、彫刻作品に囲まれて自由に活動できます。たぶん、そこにしなかない場所です。この設計は、札幌市のプロポーザルで選ばれました。

その施設つくるとき、コペンハーゲンのルイジアナ美術館に行ってきました。子どもの施設をつくる参考にするため、そこで、子どもたちのワークショップを見てきました。

使われている家具、椅子も、テーブルもヤコブセンのデザインで、多少よごれてもおおらかに見守っている大人がいて、自由に活動させている大人がいて、いいものだなと思いましたね。

ある日、完成した佐藤忠良のアトリエに行きました。子どもたちが活動をしている床と壁に、汚れ防止として新聞紙がはってありました。子どもの創造力を結果的に抑えているのが、非常に残念だと感じました。

創造することに対する価値観が違うという印象、大人の世界がますます貧しくなっているように思えました。本物を見て触って、そこまではいいが、創作活動の行為を見ると、子どもとつながってないように思えます。

司会 ありがとうございます。私たち大人の役割、私たち大人が子どもに、どう教えられるのかということですね。最後に寅嶋さんをお願いします。

子育てには余裕が必要

寅嶋 自分も新聞紙を確かに敷いて、絵の具を使っているの、反省しきりです。敷かない日もありますが、敷いている日が多いかなと。

私は今、3人の子どもを育てている真っ最中なのですが、心配なことが多くあります。子育ての情報が溢れているということです。様々な場所で、いろいろな人に関わって子育てしてきましたが、兄弟が増えると、どうしても情報がほしくなる。4度も引っ越し、主人がすぐに駆け付けてくれるところはどこかなど、色々と考えました。

市役所に行って相談するのですが、幼児期は、とにかく情報がほしくなります。いまは、携帯をクリックすると情報が氾濫していて、自分も、それに悩まされました。昼間、一人で子どもに向き合っている自分がいて、心配ばかりしていました。

体験談なのですが、石川県で長女がお世話になった広場は、とにかく広かった。そこでは、とにかくごろごろしてきました。素敵なおもちゃがある訳ではないのですが、広いだけで十分でした。最初は、広場に駆け込みたい気持ちでした。知らないことだらけだったし、子どもは一人で遊んでいました。近くに保健センターがあったのですが、長女は1歳半でも歩けなかったのも、ここがおかしいのかと、先回りしてとにかく心配していました。

そんなとき「お母さん、大丈夫」と、スタッフに声を掛けてもらったんです。子育て広場のお母さんから「大丈夫。あせらなくても大丈夫よ」と声をかけてもらった。先輩のお母さんから声をかけてもらおうと、頑張っただけでよかったなと思えました。先回りして心配するのは、一生懸命に子育てしている証です。それまで、一人で心配してきましたが、心が楽になって荷が下りた気がしました。

自分の荷が下りると、子どもも自然に、友達とうまく遊べるようになって、こんなことが出来るという、勝手に歩くようになりました。子育て広場に私は助けられました。親のあせりが子どもに伝わっていたんですね。先輩のお母さんか

ら温かい言葉をいただけることが、子どもの感性を育むことにもなったと思います。

一人ではやっていけないと気づくためにも、こういう広場は、切っ掛けになることが大事です。一人だと、どうしても調べたくなりますが、そうではなくて違った視点から子育ての方法、お母さんとしての心構えなどを知る。親としての心構えも広場でたくさん教えてもらいました。ゆとりや余裕は、一人では生まれません。こういう広場で、ちょっとしたゆとりや余裕が生まれることが、感性を育てます。子育てひろばのようなところが必要です。



あそびの広場のボルダリングで遊ぶ子どもたち

司会 本物に触れること、いい環境をつくることも大事ですが、子どもといるお父さん、お母さんに余裕がないといけないということですね。子どもは敏感です。

今日の会場には、ボランティアの皆さんにも参加いただいています。子どもとふれあうための余裕をつくっていただいているんですね。

では、最後に、子どもの感性を育てるために、これから私たち、大人が果たさなければならない役割とはどんなものなのか、お聞きしたいと思います。こどもを囲む大人としてのお話。では、井端さんからお願いします。

自然、芸術、歴史に触れる

井端 寅嶋さんのお話を、反省しながら聞いていました。大人の役割として、子どもがいろいろな

ものに触れる機会が大事。そういう機会をたくさんつくってあげるのが我々の責任です。山、川、植物などにふれるセンスオブワンダーの世界が大事だと思います。

一方で絵画、彫刻、空間にふれ、音楽を聴くことも大事。それから食べること、ただ食べるだけでなく、食べる場所、テーブル、照明、食器、そういうことも子どもたちにとっては大切なことです。レイチェル・カーソンのいうセンスオブワンダーは、主に神秘的な自然界ですが、いま話をした芸術文化は人工的な世界、その両方の環境をバランスよく経験させる機会が大事。センスオブワンダーを失った大人たちも、もう一度、子どもたちといっしょに、いろいろなものに触れることではないでしょうか。

「えみふる」は、屋内広場なので、すべて人工的につくられています。しかし、広場は、遊園地と違う。遊園地は、機械的な遊具が揃っていて、子供たちはあまり考えなくてもいいし、一人でもあそべます。しかし、広場は自由で、代表的なあそび道具があるわけではなく、考えなければ遊べません。一人では遊べない、何人かで群れて遊ぶのが広場です。そういう環境で、センスオブワンダーを身に付ける。

アクティブラーニングという考え方があります。「えみふる」の考え方とつなげれば、遊びを学習する。その中で創造性、主体性を高めていく。好奇心を育てる力になる。「えみふる」が、そこでしっかり位置づけられることが理想的だと思います。

ただものを与えるのではなく、そういう機会を与えるのが「えみふる」の意義だと思います。

簡単なものをではなく、質のいいもの、美しいものを大事にする。玩具も質のいいものがたくさんあります。我が家にも、娘が使って30年以上経っているものがありますが、今でも違和感がありません。日本製ではありません。30年以上前は、外国のものが良かった。でも、いまは違ってきています。

一昨年、トーベ・ヤンソン生誕100年記念「ム

ーミンの世界展」をみました。作品展では、彼女が活躍した 1930 年代から亡くなるまでのことを見ることができました。

戦争に反対していたころの 30 年代から晩年、亡くなるまで、どれも楽しいムーミンの絵なのですが、戦争に反対していた 30 年代のムーミンというのは、印象がいまとまったく違う。40 年代、50 年代になると温かい絵になっていく、暗く寂しい時代から始まった一人の画家の生涯です。

ムーミントロールには、100 年の歴史の意義がある。自然の美しさも大事ですが、音楽、絵画など芸術に触れることも大事。もう一つ、歴史に触れることも大切です。



あそびの広場での絵本の読み聞かせ

司会 ありがとうございます。それぞれ皆さん、自分の日々を振り返りながらお聞きになっていたかと思います。では、川上さんお願いします。

手を動かして創造力を働かす

川上 子どもの感性を育てるために大切なことだと思っていることは、手を動かすこと、自然のものに触れて違いを感じることです。例えば、積み木であれば、かたちが決まっているものの中で、どうかたちをつくり、創造力を働かせてイメージできるものがつくれるのか、などを考えていければいいな、そうなってほしいなと思います。

また、いいものを長く、いまは子育てにお金がかかるのもわかりますが、安いものをいっぱいではなく、いいものを少し買ってあげて、それを長もちさせ、大切に、子どもが代々使えるものを、大切に使うことを身に着けてほしいと思います。

司会 ありがとうございます。工夫することは、教えることではないんじゃないかと思いました。子どもは、格好よくしたいと思えば、そうしようと、頑張る。私たちが素朴だと思っているものも、子どもにとっては刺激的な面をもっているかなと思いました。最後に、寅嶋さんお願いします。

「えみふる」で持たいゆとりの時間

寅嶋 とにかく、いろいろな方と触れ合うということに尽きると思います。大学の講義で、健康講座をしているのですが、学生には、いろいろ体験してほしいと思って、赤ちゃんを抱っこさせたり

します。

はじめて抱っこする子もいますが、何回もその経験を積む学生もいます。町内会にも参加して何回も経験する学生もいますが、20 歳ではじめて、赤ちゃんを抱っこするという学生もいます。

昔から、大人と触れ合っている学生は、お母さんとのコミュニケーションが上手ですが、はじめての学生はとても緊張しています。お母さんに、「頑張ってるね」といわれて、地域のお母さんに育ててもらっているような学生も何人かいます。

様々な場所で出会った大人、子どもたち、「えみふる」に来れば、自分の家にはいない大人、お姉ちゃん、いろいろな子どもにふれあえます。ふれあいは大事です。

子育て広場で、私は、親子ともに成長させてもらいました。子どもは褒められ、親としても育ててもらいました。ふれあいは大切です。声をかけていただき、そこから生まれるコミュニケーションから始まったりします。

意外と子どもは母親を良く見えていますね。どういう表情で、どんな身振り手振りで、スタッフさんとコミュニケーションしているか見ているんです。

私と周りがつながっていることが判ると、娘も

周りにつながってきます。子どもからスタッフに「はい」と言ったりするようになります。親も広場の人につながって、ゆとりが出てくると、子どもにも、大人にも、いろいろな人に声かけをしていくようになり、子育てに自信がもてたりします。絵を書くとか、何かをしようとして、前向きに自分からいろいろなものに触れていこうとします。

そういうつながりは、声かけしてくと、少しずつ育っていくように思えます。

今でも当時の地域のおじいちゃんおばあちゃんとは、やりとりが続いていて、その世代にはたくさんお世話になっています。また、子育て広場で育ててもらった息子は、今でも支援スタッフさんと仲良く手紙の交換をさせてもらっています。

転勤の方が多いと思うのですが、支援スタッフさんとのふれあいが感性を育てる大事なことだと思います。「えみふる」も、是非、地域のみなさんといっしょに育って行ってほしい。就学してしまうと、小学校、中学校でたくさん時間がとられるので就学前の出会いが大事です。

それと、もう一つ、他人と比較をしないこと。それは、18-19歳になって始まることでなく、小さいころからの積み重ねだと思うので、だれだれより旨く書けるなど、兄弟の比較をしないように、言い続けています。

比較するよりも、それぞれ個性があると思う方がよいのですが、どうしても比較してしまう。1歳になって歩いている子どもを見ると、自分の子どもが大丈夫かなとあせってしまう。

ゆとり、「えみふる」で過ごす時間、お子さんも大人も一緒に感性が育っていく時間、と表現することができるかもしれませんね。

司会 3人の皆さんから、お話を頂きました。人とのふれあいという点が、共通していました。子どもは大人をよく見えています。子どもを育てるのは、保護者の役割ですが、保護者だけでなく、私たちみんなに役割があるということかも知れません。ではここで、会場の皆さんの声をお聞きました

と思います。パネラーへのご質問、また感想などでも結構です。いかがでしょうか。

会場 3人の方からそれぞれの話を聞きました。一番感動したのは、川上さんのお話。小さいころからの木で遊び、いろいろな知恵、積み木というのは難しいと思うが、それが出来るんだと育ってきたこと。これからの子どもたちは、色々な経験をする事によって、知恵がついてくる。ここまですることができるには、その人の技量にもよるが、こういう発想ができることが素晴らしいと、いいお話を聞きました。井端先生の話も、経験がその人その人の創造力を育てるんだなと思いました。

子どもの成長と感性

会場 貴重なお話ありがとうございました。子どもの感性、未就学児、幼少の子、感性というものは幼少期だけでなく、小学校、中学校で、大きくなっていくのではないかと思います。世代で育っていく感性というものについて、どのように考えたらいいでしょうか。

井端 「えみふる」の広場は、小さい子どもが対象ですが、小中高も含め、学校をつくる時には、建築を通して非日常的な空間をつくらせたい、子どもたちがワクワクするような空間をつくらせたい、びっくりするような空間にしたいと考えます。

その年齢に沿って、感性を引き出してやろうという気持ちで、学校を設計しています。空間だけでなく、家具だったり、内装、色、かたち、子どものために何が仕事として出来るだろうと考えてつくったもので、結果、喜ばれているものもあります。

先生が「この空間が好きだ」という話をする、子どもたちも、大きくなって改めて、そこから違う感性を引き出してくれるように感じます。

司会 先生から、「この空間がいいね」といわれる。子どもって、大人からそういうふうには話しかけら

れると、対等に見てもらえたと感じます。素敵な空間の中でのそうした対話から、関係が生まれます。「これいいよね」という対話、「えみふる」の空間では、子どもだけではなく、大人にも生まれると思います。そういうお話が出来ればいいですね。寅嶋先生、お子さんと学生さんとは違うとは思いますが、成長過程で何かあれば、お願いします。

寅嶋 社会人になる前、できるだけ早い段階で、地域の方と触れ合う機会が大事だと思います。学校の中だけで育つのではなく、いろいろな人の声を聞く、創造力を育て、アドバイスを聞くことが大事です。中学校、高校の先生になりたいという学生が結構いますが、地域の方には、会話を通じて学生に教えてもらっています。

お母さんも子どもも、成長するにつれて触れ合う人が変わっていきます。小さいときから、だんだん大きくなると、例えば、学校の中に居る人、大学生になると、地域の人など知らないところの人と触れ合う。そうして、まったく会ったことない人はいなくなるなど。こういう人と人とのふれあいの基本は変わらないと思います。

司会 小さいころから触れ合う機会を大事にすること。反対に私たち大人は学生さんたちとどんどん触れ合っていくことが、大事ということになりますね。



ログ積み木で遊ぶ親子

親子であそびを共感する

会場 私には8歳、5歳の娘がいますが、何もないところから遊びを考えています。8歳の子は、遊びに行く

ところで一番好きなのは色彩館。遊具はありませ

んが、お弁当にラケットをもっていくのが一番好きだ言っています。

そこで、自分たちでかくれんぼし、戦っています。子どもが、リーダーになって、大人といっしょに遊ぶ体験が、子どもの心に残るようです。ふれあいの中で、大人といっしょに楽しかったという共感が大事だと思いました。

プレーリーダー、遊びを分かち合う大人という話がありました。面白いおもちゃを、代々使うことも、また、手を伝わっての共感、多くの方と共感できる経験から子どもの感性を育ててくることが大事だと感じました。

「えみふる」を拠点に、感性を育てる力、遊んでいくことを考える力もついていくのかなと思いました。

司会 共感すること、大人と触れ合うことが大事なのですが、近所であいさつすると、不審者といわれる残念な時代です。「えみふる」で大人と触れ合う共感する機会をつくるのが大事という思いを新たにいたしました。さて、普通なら、ここで、今日のまとめをさせて頂くところですが、今日は、皆さんに、レイチェル・カーソンの「センスオブワンダー」の一節をご紹介します、まとめに代えさせて頂きたいと思います。

子どもたちの世界はいつも生き生きとしていて新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに・・・

(中略)

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了させていただきます。

3人のパネラーの皆さん、ありがとうございました。皆様、パネラーの皆さんに拍手をお願いいたします。

会場の皆様、ありがとうございました。お気をつけてお帰り下さい。